

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 161号

平成27年9月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (10)

人生は専一に貫く生き方が理想的

安倍能成と石原謙は一高の大先輩である。安倍能成先生とは遠い縁であるが、石原謙先生とはICUの建設の際いろいろ教わったし、又教会のできたとき祝祷を述べてもらった。石原謙先生は、文化功労賞をもらっている。石原謙先生はキリスト教史を専一に貫いたが、安倍能成先生は私の見るところでは、雑学を沢山やられ、専一に貫くところはなかった。人間は専一に貫く生き方が理想的である。諸君も専一に貫いてもらいたい。

聖書の勉強にも専一を貫いてもらいたい。宗教は万人の特権である。諸君も死ぬまで聖書を研究する決心をしてもらいたい。聖書は信仰の練達者が書いたものであり、初めから分かるものではない。むつかしい事はいくらやさしい言葉で言っても分からないように、

新約聖書は分かりやすく書いてあるけれども最高に難しいものである。死ぬまで聖書と取り組んでほしい。聖書は人生におけるいかなるものにでも勝ちぬくものである。こういうものは5年や10年で分かろうとしても無理である。同志会で commencement し、死ぬまで聖書の勉強をして欲しい。聖書は生命の書であり、2000年間続いている意味が分かる。

「人生は苦しいけれど一度は過ぎる意味あり」(内村鑑三)。職業とは別に毎日5分でも3分でも聖書の勉強をしてもらいたい。

(昭和38年6月21日 金曜会 続き)

陰徳をめいめいの家に積み

故モーク先生（小西先生の先生）の伝記が出版された。

芝温公の言葉。「罪を以て財を積んでも子孫これを守らず。書を積んでも子孫これを読まず。陰徳をめいめいの家に積んで子孫長久の策を図るに如かず。」

学生時代野球の試合で勝った帰り先輩を訪問（当時大蔵省課長）した。その時先輩が次のように語った。「先輩を訪ね話を聞け。どういう人間に会ったかということがその人間を決定する。また会ってくれない先輩には会う必要がない。」

（昭和 38 年 7 月 5 日 金曜会）

ただ一つのこと

法然上人に親しむ。隆寛は法然の弟子で、阿弥陀経を唐・呉・和文で3巻毎日読む。「その中で念仏せよとあるので私はそうする」と法然が言うので、私（隆寛）もそうすると信じ実行した。

新・旧約聖書もただ一つのことを言っているのではなかろうかと思う。聖書の文字の研究も結構であろうが、聖書の中の言葉を実行する方がより意味が深い。ただ一つの教える真理が体得出来ることは素晴らしい。ペテロ、ヨハネにしても、精神的、物質的には豊富ではなかったであろう。

Life does not consist in abundance of possession. 真理を得るには聖書知識の豊富さによらない。わが一つの力はイエスであればよく真理は分かりやすく教えられるものではなく、分からせられるものである。一生かけてそれを求め、分かろうと努力せよ。

(昭和38年9月13日 金曜会)

願と行

仏教の浄土門の言葉に「願」と「行」というのがある。「願」を達するために行うことが「行」である。何事も願行具足すれば達成することができるというのである。何事も「願」があって真実の「行」があれば必ず達成する。偉いと言われた人は皆願を、一生変わらぬものを持っていた。本当の願が起こったら行がついてくる。真剣にやれないのは願がないからだ。こういうことをやるぞという願を立てればできる。君達も本当に願を立ててみよ。願が確立したら、行がついて来て、行をやるにつれて願が強くなる。

(昭和 38 年 10 月 4 日 金曜会)

自分の目の前に落ちて来たことを誠心誠意やる

NHK第一放送の6時40分からの「人生読本」での話。ある人が「子供の心」ということについて語り、学生時代と言ってもこれは準備時代ではなく、人生の一時代だということを先輩から聞いて泣かれたという。子供が準備時代で大人が働く時代でなしに、その時代時代、時間時間がその人を作っている。小さい時から毎日毎日的那个人であるから、私も同志会の諸君が毎日毎日を真剣に送って頂きたいと思う。平凡な生活だが自分の目の前に落ちて来たことを誠心誠意やる。私も65年の生涯からそれをつくづくと感ずる。そしてそれは能力とか効果とかを目につけずやったらよい。私も優秀ではないが一生懸命やったので、昔勤めた会社に行くと今でも大事に扱ってくれる。このようにして15年間やってきたらちょっと聖書のこと分かって来た。これも毎日毎日やって来た賜物である。…

思想と生活は離れていない。思想が分からないというのはその生活をしていないからである。思想というものは切ったら血が出てくるものだ。その思想を理解するためにも生活をもってしなければならぬのである。

(昭和39年5月15日 金曜会)

力のあるものは天国に入れない

力のあるものは天国に入れない。赤児のようにならなければならぬ。コツ。これがキリスト教のコツです。イエスが一番嬉しく感じたのは、十字架上でイエスのわきの十字架につけられた泥棒がイエスに向かって「私を思い出して下さい」と言われた時だと思う。救われるための人間的条件を持ってはいかん。善行にひっかかっておる。富にひっかかっておる。

宗教というものは本当に分かれば人のため国のために働く力が出てくるらしいな。阪井先生が病気が治られて来られたらすごい働きが出来ただろうと思う。献身というのが出てくると思う。先生の晩年は、外面的には恵まれていなくても、先生自身にとっては非常に恵まれたものであった。

(昭和 39 年 6 月 12 日 金曜会)

聖書は人類 2000 年の経験によって残ったもの

諸君、こうしたら救われると書いてあるところには注意したまえ。
自分で分かったと思って頭でこしらえたものは吹けば飛んでしまう。
誠心誠意、聖書を読まなければならない。人類 2000 年の経験によっ
て残ったもの、これは科学と一緒にだと思ふ。実験済みだよ。この頃
の若い科学者は聖書について書かれた書物を勉強し、聖書は勉強し
ていない。これはいけないと思ふ。

(昭和 39 年 6 月 12 日 金曜会 阪井会長追悼会)

いかにして聖霊を受けるか

私は牧師になって15年間、ヨハネ伝、使徒行伝、ロマ書、コリント前書を勉強してきた。15年間聖書にかじりついた。ようやく聖書は何を言わんとしているかを解するようになった。内村鑑三曰く、「如何にして聖霊を受くべきかを知らずして福音書を読んでも理解できない。」これは内村先生の卓見であったと思う。…

内村先生は20年間柏木に住んでいた。大正7年YMCAへ出て来た。再臨信仰を述べるためにであった。YMCAの理事に出て行くように言われた。内村先生は藤井武先生を通してその理由を問うた。これがその理由であった。内村先生は晩年には説教は十字架の贖い一本にしぼられ、奥義は人を見て説かねばならないと悟られたからだろうと推測する。内村先生は自分の一人娘が亡くなった時に復活の信義が分かったらしい。人生熟すことが必要である。私も今になってたまたまこれがキリスト教のポイントであるなと思うことがある。

(昭和39年7月3日 金曜会)

信と行について考えよ

Miss Laura J. Mauk について：Miss Mauk は私の信仰上の師であった人です。彼女は1914年伝道女学校の教師として来日された。彼女は一方では伝道女学校の教師として努めつつ、他方月曜会（バイブルクラス）を組織して青年男女の信仰の導き手となった人です。彼女は天国に帰るという望みを抱き謙遜で慈愛に満ちておられた。そして40年間黙々として伝道に尽くされた。彼女はまさに信と行の人であった。天国への信仰は確固としていた。そしてその生涯が示しているように行ないの人でもあられた。

諸君、信と行について考えよ！ キリスト教の信とは何か。行とは何かと。この2年間みっちり考えよ!! 行の伴わない信仰は駄目です。キリスト教が無力なのは信だけを説いて行がないからに違いない。とにかく批判されがちな創価学会が依然として有力なのはなぜか。私は信と行が並存しているからだにとらんでいる。どうか諸君、Mauk先生は信と行の人であられたのですが諸君もそのようにあって欲しい。

（昭和39年9月18日 金曜日）